天使のおくりもの

天使のおくりもの

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16399242

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ヒュンマフェス

原作終了から数年後のネイル村にて。
子どもネタがあるので要注意。

結婚したら、あるいは、一緒に暮らすようになったら、絶対に話し合うべきことの一つ。

表紙は、小兎-coto-様user/711633にお借りしました。
2021.10.17ヒュンマフェスオータム設置のweb拍手お礼画面からの再掲載。一部、加筆修正。

天使のおくりもの

　その日は、母さんの手伝いで、臨月の妊婦さんの元へと急いだ。
　思ったよりもお産の進行が早く、私は母さんに指示されるまま、急いでお湯をたらいに張り、タオルを用意して、その時を待った。
　苦痛にうめくその人の腰をさすり、手を握って励ました。
　そんな時間がしばらく続き、やがて、小さな産声が上がった。
　その小さな体を、母さんが、私の用意したお湯できれいに洗ってあげていた。
　まるで、生まれる前の世界を洗い流すかのように、小さな体についた真っ赤な血を落とし、洗い上げると、私は、用意していた柔らかなリネンタオルでその子を受け止めた。
　すると、その小さな姿を見た、母になったばかりのその人は、小さくつぶやいた。
「やっと・・・会えたね・・・。」
　私は、温かい気持ちになって、彼女の腕にその子を手渡し、抱きかかえてもらった。

　いいな。
　素敵だな。
　胸が温かい、優しい気持ちになる。
　家へと戻る帰り道、私は、母さんと、新しくネイル村の住人になったあの小さな子のことを語り合った。
　お母さんに似ていたね。
　お父さんも泣いてたね。
　元気に生まれてよかったね。
　そんな言葉が口をついて出る。
　そうして温かい気持ちのまま家に着いた。

　私が自宅に戻ると、いつものように、彼が出迎えてくれた。
夜も遅い時間になっていたけれども、寝ずに待っていてくれたようだった。リビングにランプをともし、その明かりの下で本を読んで

いたようだった。
「おかえり。」
「ただいま。」
「大丈夫だったか？」
「うん。お母さんも赤ちゃんも無事よ。」
「そうか。よかったな。」
　たわいのない、いつも通りの会話。
　けれども、私は、ふと、そのときに、自分自身に違和感を覚えた。
　いつもなら、一緒に暮らす彼に、その日にあったことを詳しく話している。
　でも、このときは、私は、母さんを手伝って見てきたことを、これ以上詳しく彼に話す気になれなかった。
「疲れただろう。休むか。」
「うん・・・。」
　彼は、いつもどおり、優しかった。私に気を遣ってくれているのが分かった。
　でも、私は、その優しささえもが怖かった。

　私は、漠然とした居心地の悪さを感じながら、いつものように彼と寝室に入った。
　そして、いつもと同じように、彼の隣で横になった。
　ふと、彼が私の背に腕を回した。ぎゅっと抱きしめられる。
　私は、どきりとして、身を固くした。
　すると、少しして、彼がその腕を私から離した。
　私は、ほっとしたような、漠然とした不安を覚えたような、複雑な気持ちに襲われた。
今日のことが話せないこと。
　奇妙な居心地の悪さ。
　そして、抱きしめられたときに、体が固まってしまったこと。
　そのくせ、それ以上、求められなかったことに不安を覚えたこと。
　それはたぶん、どれも同じことが原因なのだ。

戦いの中にあったときも、そのあとも、こうして一緒に暮らすようになった後も、彼とは様々なことを話し合ってきた。その過程を経て、私たちは、お互いの気持ちを寄り添わせていった。
でも、まだ、ひとつだけ、彼と話していないことがある。
それが、何かはわかっている。
彼の複雑な生い立ちやこれまでの生きざまを考えたときに、口に出せないことがあった。
もし、私が願えば、彼はきっと拒否はしない。そんな確信がある。
でもきっと、そんなときの彼は、自分の感情を押し殺して、それでも私の希望を優先させてしまうのだろう。
少し、困ったような笑顔を浮かべて。

きっと、私は、怖いのだ。
彼に、そんな顔をさせてしまうことが。
彼に、本心では、拒否されることが。

マァム

朝起きると、彼女は、急いで出かけていった。
昨日、彼女の母が看たという、産婦の元だろう。母子の健康状態を確認しに行ったのだ。
それ自体は、当たり前のことだ。むしろ、出産の翌日に、医業に携わる者が看ないという方がおかしい。
だが、俺が気になったのは、今朝出ていく時の彼女の様子だった。
いつも通りに笑っているように見えるが、明らかに無理をしていて、どこかよそよそしい。
そして、あまり多くを語ろうとしない。
普段は、一人で外に出たときには何があったのか、事細かに教えてくれるのに、昨日のことは詳細を語ろうとしない。
その原因は、何か。

俺にも察しはついていた。

　日中の仕事を終え、昨日と同じように、夜、彼女の帰りを待ちながら、俺はリビングで昨日の続きを読んでいた。
しかし、どうにも内容が頭に入らない。ロモスの歴史を書いた書物で、知らないことばかりなのが面白いと思っていたはずなのだが。
　彼女の取り繕ったような今朝の笑顔が、頭から離れなかった。
　やはり、きちんと話をしなえればならないな。
　本当は、もっと早く、そうするべきだったのだ。
　俺は、読んでいた本を閉じてテーブルの上に置いた。
　そうして、彼女を思い、思案に暮れていると、昨日と同じように、ドアが開いた。
「おかえり。」
　俺はいつものように、彼女を出迎えた。
　彼女は、今朝と同じ、ぎこちない笑顔のまま、俺を見た。
「ごめんね、今日も遅くて。」
「いや、俺のことは気にしなくていい。
　今日も疲れているだろう。お茶を淹れようか。」
　俺はキッチンに立って、竈の火を起こし直し、湯を沸かした。
　竈にかけたやかんの水が、熱せられて、少しずつ軽快な音を立て始める。次第に立ち上る湯気が室内をほのかに潤した。
　俺は、春のうちに彼女が摘んで干しておいたカモミールをポットに入れて煎じ、カップに注ぐと、ほんの少しのはちみつを加えた。
　そうして入れた甘めのカモミールティーを彼女に差し出すと、彼女は安心したようにそれを受け取った。
　彼女は、両手でカップを持ち、手を温めながら、少しずつ、喉を潤していった。
「落ち着いたか？」
　俺が彼女に声をかけると、彼女は、申し訳なさそうな顔をして俺を見上げた。

　俺は、彼女の隣に椅子を置き、そこに腰かけた。
「温まったら、少し話をしようか。

俺に、何か話したいことがあるんだろう？」
　すると、彼女は、おびえたような目になった。
　一瞬だけ俺を見上げ、だが、またすぐに瞳を伏せた。そうして彼女が口にしたのは、謝罪の言葉だった。
「・・・ごめんなさい。」
「何故謝る？」
「だって・・・私がおかしな態度取ってるから・・・。」
「それはお前のせいじゃない。
　・・・むしろ、お前に気を遣わせていることを申し訳ないと思っているのは、俺の方だ。」
　そうして、俺は、極力穏やかな声で、彼女を怖がらせないように、だがはっきりと、核心の言葉を口にした。
「子どものことだろう？お前が気に病んでいるのは。」
　その言葉に、彼女ははっとしたように顔を上げた。
　そして、震える声で俺に問いかけた。
「・・・どうして・・・？」
「見ていればわかる。お前が何を気にしているのか。何に悩ませてしまったのか。」
　俺は、困ったような笑顔を浮かべ、彼女に尋ねた。
「情けないことだが・・・俺の話を聞いてくれるか？」
　すると、彼女は、戸惑ったように口を開いた。
「情けない・・・？」
「ああ。」
　俺は自嘲気味に答えた。
　俺は、淡々と言葉をつなげた。
「お前とともに生きていきたいと思い、お前とともに生きていこうと約束したときから、いずれこの問題が大きくなるだろうとは思っていた。
お前が、戦災孤児の子どもたちや、街の子どもたちに接する様子は見てきたからな。お前が、自分の子どもを欲しがるだろうということは、わかっていた。」
　そして、俺はいっそう、自嘲めいた笑みを浮かべた。
「情けない話だが・・・俺は、怖かったんだ。」

彼女は、そんな俺に、真摯な視線を向けてくれていた。
　俺は、そのまま言葉をつづけた。
「俺の血を分けた者が、まともな人格に育つのだろうか。
　俺に、父のように子どもを慈しんでいくことができるのだろうか。
　ずっと、自問していた。」
　その言葉に、彼女が傷ついたような顔をした。
　俺のこのような言い方が彼女を悲しませるのはわかっていたが、この時は避けられなかった。
「暗黒闘気のことも知っているな？
　俺の体には、俺が子どものころに取り込んだ暗黒闘気が残っているということも。それが、俺の血を受け継いだ者にどう影響するのかも、俺にはわからなかった。」
　俺がそう言うと、彼女は考え込んだようにうつむいてしまった。この先の否定の言葉を予感したのかもしれない。
　俺は、わざと、少し声色を変えた。彼女を不安にさせたくなかった。
「だが、俺は、お前の望みをかなえてやりたかった。お前の願うことを否定したくはなかった。
　だから、もし、お前に、子どもが欲しいと言われたら、それを受け入れようと思っていた。
　お前が望むことだからと、そう、自分に言い聞かせていた。
　暗黒闘気は、子どもに移らないだろうと先生に言われたことにも、後押ししてもらった。
　その頃はまだ、お前のためだという考えでしかなかった。」
　彼女は、じっと、俺の言葉を聞いてくれていた。おそらく、ある程度は、俺の言葉は彼女の予想どおりだったのだろう。
　俺は、言葉をつづけた。
「だが、この村に来て、お前と暮らし始めて・・・俺は、また、お前の違う一面を見たよ。
　お前がどれだけこの故郷を大事にしていたのか。
　この村のために身体を張ってきたのか。
　村のみんなが、どれほどお前を誇りに思っているのか。

お前に子どもが生まれると聞けば、お前も、村のみんなも、どれほど喜ぶだろうか、と思った。」

　俺は、この村に来てからのことを順に思い返していった。

　この村に来て、見たこと、知ったこと。

　そして、この手に取り戻したことを。

「それだけじゃない。

　この村に来て、俺は自分が子どものころのことも思い出すことができた。小さかったお前のことも、思い出してきた。

　俺が初めて会ったころのお前は、本当にまだ小さかった。俺も子どもだったが、その俺の半分ほどの背丈で、あどけなくて、舌足らずで、でも懸命に俺を追いかけて、俺のことを呼んでくれて・・・。」

　俺は、脳裏に、３歳だった彼女の姿を思い浮かべた。長いこと思い出すことさえなかったその記憶が、この村に来てから急激によみがえってきた。

　俺は、自然に、頬がほころぶのを感じた。

「かわいかったな。

　お前の子どもなら、きっと、あの頃のお前に似るんだろうなと思った。可愛らしく、愛おしいのだろうな、と思った。」

村の子どもたちが、広場で、小路で、だんごになって遊んでいる。そんな風景の中に、俺は、幼い彼女の幻を見ていた。

「 村の子どもたちを見るたびに、俺は思った。

お前は、あんな風に育ったんだな。この村と森に育まれたのだな。この村の人々と森の自然が、お前をこんなにも、強く、優しく育てたのだな、と。

いつの間にか、村の子どもたちの中に、小さかったお前の姿を思い出して置いてみるようになっていた。

　そうしたら・・・見てみたくなったんだ。

　お前の子どもを。」

　そして、俺は、まっすぐに彼女を見た。

　生涯口にすることはないと思っていたはずの言葉を口にした。

「見てみたくなったんだ・・・俺たちの、子どもを。」

　彼女は、震える声でつぶやいた。

「・・・私は、あなたに家族を作ってあげたかったの。あなただから・・・。」
　その言葉に、俺はうなずいた。
「ああ。お前がそう思ってくれていることも分かっている。
　俺も同じだ。
　お前だからだ。
　お前だから、不安よりも、望む気持ちの方が強くなれたんだ。」
　俺の言葉を聞いていた彼女の目に、次第に涙があふれてきた。彼女は潤んだ声で、俺に問いかけた。
「じゃあ、いいの・・・？私・・・。」
　俺はそっと、彼女の髪を撫でた。愛おしくてたまらなかった。
　俺は、ゆっくりとうなずいた。
「ああ。・・・頼む。」
　そして、俺は、この日、何度目になったかわからない謝罪の言葉を口にした。
「すまなかった。マァム。もっと早くこの話をするべきだったんだ。
　俺が臆病だった。」
　すると、彼女は、懸命に首を横に振った。
「そんなことない。私は、貴方がそう言ってくれることだけで、十分だわ・・・。」
　そして、俺は、やや皮肉めいた言い方をした。
「第一、子どもができるようなことをしておいて、責任を取らないのではあまりにも不誠実だろう。」
「それはそうだけど・・・。」
　彼女は、困ったような笑顔を浮かべた。
　俺は、もう一つ、心に決めていた言葉を彼女に告げた。
「もちろん、望んでも、恵まれないこともあるだろう。
　そのときは、マァム、二人で生きていこう。」
　すると、彼女は、少し驚いたような顔をした。そして、涙のたまった瞳を閉じ、ゆっくりとうなずいた。
　俺は、彼女への愛おしさが抑えられなくなった。そっと、その身体を抱きしめた。

俺の腕の中で、彼女がささやいた。
「ヒュンケル。」
「なんだ？」
「私・・・あなたを好きでよかった。」
　まっすぐな言葉が、俺を打つ。
　その心遣いをありがたく思いながら、俺は、少しだけ、いたずらめいた笑みを浮かべてみた。
「奇遇だな。
　・・・俺もだ。」
俺は、彼女を抱きしめたまま、微笑んだ。そして、そっと、その唇に口づけをした。
　この腕の中に彼女がいて、俺を思ってくれている。
　その僥倖に感謝した。

ヒュンケル